アンテベラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑪

おやさと研究所講師
中西　光一 *Mitsukazu Nakanishi*

前回（10月号）では、マシュー・フォンテーン・モーリーの「ブラジル・アマゾン開発構想」がジェームズ・クーリー・フレッチャーに大きな衝撃を与え、ブラジルとアメリカの関係構築を妨げる要因となったことを確認した。当時のアマゾンは、豊かな天然資源と自然環境に恵まれた地域として知られ、アメリカ南部の博物学者や探検家から、しばしば「地上の楽園」と称されていた。歴史学者マリア・エレナ・ペレイラ・トレド・マシャド（Maria Helena Pereira Toledo Machado）は、19世紀を通じて、アマゾンが「資本主義・帝国主義的拡張の言説の中心地」[(1)]と位置づけられていたと指摘している。モーリーもまた、こうした言説に影響を受け、アメリカ南部の奴隷主と黒人奴隷をアマゾンに移住させ、大規模なプランテーションを築く構想を描いた。しかし、このような構想を抱いたのは、モーリーが最初ではなかった。

開拓者精神に潜む奴隷制

実のところ、黒人の海外移住を促すアメリカの試みは、2024年12月号で紹介した「アメリカ植民協会（American Colonization Society）」の取り組みにまでさかのぼる。同協会の活動によって、1820年から1864年の間に約11,000人の自由黒人がアフリカ西海岸のリベリアへ移住した。黒人の国外移住をめぐる機運が高まるなか、政府レベルの取り組みにとどまらず、個人レベルでこうした構想を推し進めた人物が、2025年8月号で紹介したウィリアム・ウォーカーである。こうした試みの背景には、「マニフェスト・デスティニー」に象徴されるアメリカの領土拡張主義が深く関係している。当時の文学作品に目を向けると、領土拡張を支えたアメリカ人の心情を、より鮮明にうかがうことができる。

特に、詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）の詩集 *Leaves of Grass*（1867）に収録された“Pioneers! O Pioneers!”[(2)]には、自由と未開の土地を渇望するアメリカ人の姿が、躍動感のある筆致で描かれている。そこには、未知の土地を切り開いていく不屈の開拓者精神と、その高揚感が表現されている。また、主人とその奴隷を開拓の冒険を構成する登場人物として描いている点は、アメリカの開拓や発展の過程に奴隷制が組み込まれていたことを示唆している。

さらに注目すべきは、「武器を準備せよ」「私たちは、より新しく、強力で、多様な世界を切り開く」「行進しなければならない」、そして何よりも「すべての主人とその奴隷、開拓者たち！」といった表現である。これらの表現は、当時のアメリカ人の精神を鮮明に表している。すなわち、「主人」「奴隷」「開拓者」という異なる存在が、開拓と国家の発展という一つの物語のなかに組み込まれているのである。少なくとも、こうした認識が当時のアメリカ社会に存在していたことはうかがえる。

この点からすれば、モーリーやウォーカーにとって「フロンティア」の開拓とは、単なる領土の拡張ではなく、奴隷制の拡大そのものでもあったとみなせる。そして、彼らの構想の特徴は、「フロンティア」という理念のもとに、奴隷制を資本主義的・帝国主義的な拡張の論理へと組み込んだ点にあった。しかし、その「開拓」の先には、やがて反動が待ち受けていた。

モーリーの構想とフレッチャーの苦悩

フレッチャーにとって、モーリーの歯止めのきかないアマゾン開発構想は、看過できないものであった。確かに、フレッチャー自身も開拓者精神を備えていたといえる。しかし、彼の頭のなかにあったのは、奴隷や武器ではなく、聖書を携えて行進する姿であった。実際、フレッチャーはモーリーの構想について、*Brazil and the Brazilians*（1857）で次のように述べている。[(3)]

> 大河アマゾン川を強制的に開放させるため、ニューヨークで「フィリバスター」の遠征隊が編成されつつあるとの報道が流れた際、モーリーのアマゾン川に関する一連の書簡が首都にもたらした騒ぎを、私はよく覚えている。モーリーが「フィリバスター」行為を助長するような議論を用いたことは、まことに遺憾である。（…）それ以来、本来わが国が緊密な関係を築くべきブラジルとの条約締結交渉は、不可能となってしまった。

ここで注目すべき点は、「フィリバスター（filibuster）」という言葉が用いられていることである。この語は、当時、私的な武装遠征を意味し、帝国主義的拡張の一環として行われる軍事侵略や領土獲得とも結びついていた。こうした動きを、ブラジル帝国は軍事的脅威とみなし、アメリカとの関係構築は困難になった。しかし幸いにも、モーリーの構想は実現に至らなかった。アメリカにおける奴隷制廃止運動が高まるなか、構想は次第に支持を失っていったのである。

ただし、この一件はフレッチャーに大きな影を落とし、彼を外交活動から遠ざける一因となった。その後、フレッチャーは1855年に再びブラジルを訪れ、両国関係の改善に向けた方策を模索した。この2度目の訪問で、フレッチャーはブラジル人奴隷主と接触し、プロテスタント伝道を進めるうえで、ブラジルにおける奴隷制の全面的な廃絶が必要であると認識するに至った。この点については、次回に詳しく見ていきたい。

［註］

（1）Maria Helena P. T. Machado. *Brazil Through the Eyes of William James: Letters, Diaries and Drawings, 1865-1866*. Harvard, MA: Harvard University Press, 2006, p. 128.

（2）Walt Whitman; Emory Holloway. *Leaves of Grass*. Abridged ed. Garden City, N.Y.: Doubleday, Page & company, 1926, pp. 279-282.

（3）Daniel Parish Kidder and James Cooley Fletcher. *Brazil and the Brazilians: Portrayed in Historical and Descriptive Sketches*. Philadelphia: Childs & Peterson, 1857, pp. 578-579.